ドイツ民主共和国の教科体育における 「スポーツ章テスト」の位置づけ

岸 本 肇 (神戸大学)

(昭和61年12月1日 受付)

Positionen des „Sportabzeichenprogramms“ im Fach Sport
der Deutschen Demokratischen Republik

Hajime Kishimoto¹

Zusammenfassung

Dieser Artikel geht aus dem Interesse für das Fach Sport der DDR heraus, in dem körperliche Grundausbildung als Hauptziel verfolgt wird, und analysiert, wie das „Sportabzeichenprogramm“ in den Zielen und Ausbildungsbereichen des Faches Sport zusammengefügt ist.

Infolgedessen tritt es hauptsächlich folgendes deutlich hervor:

1. Die in den Abzeichen-Stufen Gold, Silber und Bronze vom Sportabzeichenprogramm der DDR geforderten Normative machen die erreichbaren Leistungsziele für körperliche Grundausbildung während der ganzen 12 Jahre der schul- und Berufsausbildungspflicht aus.
2. Die Niveaus „1 Punkt“ der Grundbedingungen und Zusatzbedingungen vom Sportabzeichenprogramm der DDR sind die niedrigeren erreichbaren Leistungsziele, im Vergleich mit den Leistungszielen der ähnlichen sportmotorischen Teste in den anderen sozialistischen Ländern, z.B. UdSSR und China. Diese leichten Leistungsziele regen, scheint mir, sogar die sportlich schwachen Kinder und Jugendlichen zur körperlichen Bildung und zum Sporttreiben effektiver an.
3. Die Losung des Sportabzeichenprogramms „Bereit zur Arbeit und zur Verteidigung der Heimat“ stimmt mit dem sozialen Ziel vom Fach Sport der DDR überein.
4. Alle Bedingungen der Disziplinen vom Sportabzeichenprogramm der DDR werden als die Inhalte der abgesehenen Fähigkeiten sowie Leistungskontrollen in den ganzen Ausbildungsbereichen des Faches Sport konkret dargestellt.
5. In der DDR wird der Besitz des Sportabzeichens bei der Festlegung der Jahreszensur berücksichtigt. Dadurch angeregt, können die betreffenden Schüler im Sportunterricht weit mehr positiv werden.
6. Auch in der sportlichen Selbstbetätigung, die das Fach Sport in der DDR unterstützt, ist das Sportabzeichenprogramm in Verbindung mit dem Sportunterricht breit und weit durchgeführt, um der allseitigen körperlichen Entwicklung der Kinder und Jugendlichen dienen zu können.

Die Ideen und Durchführungen vom Sportabzeichenprogramm der DDR, wie aus den oben skizzierten Betrachtungen herauskommt, können auch bei uns Japan, trotz der Verschiedenheiten des sozialen

¹ Kobe University, Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe (657)

Systems, zur Praktika der Körpererziehung viel Beiträge machen, die in den Kindern und Jugendlichen die selbständigen Fähigkeiten in der körperlichen Bildung und am Sporttreiben in Zukunft entwickeln soll.

(Hajime Kishimoto, "Positionen des „Sportabzeichenprogramms“ im Fach Sport der Deutschen Demokratischen Republik", *Jap. J. Phys. Educ.*, 32—1 : 25—35, June, 1987)

1. 問題の背景と研究の目的

今日、多くの国が国家的機関や公的な体育・スポーツ団体が作成した体力・運動能力のバッテリーテストをもっている。わが国の「スポーツテストのねらい」³⁰⁾ (文部省体育局, 1963年) もそうであるように、この種のテストの実施によって国民の体力向上をめざし、スポーツの普及発展をはかろうとする意図は、各国に共通しているからであろう。それらに関する国際的な動向は、たとえば日本体育協会スポーツ科学委員会²²⁾によって調査されているし、国際体力テスト標準化委員会¹⁹⁾による「標準化」への試みもなされているところである。

しかし本来、そのように期待されている体力・運動能力テストの実施による社会的効果は、学校体育との有効な連携があってこそ、より大きくなるものであろう。こう考えるとき、憲法に体育・スポーツが国民の心身の全面的発達に奉仕すると明記し(ドイツ民主共和国憲法18条3項)、学校の教科体育³¹⁾の目標に「身体的遂行能力 (körperliche Leistungsfähigkeit)」の発達と人格形成の統一を前面に掲げ (Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 5)、その目標達成に向けてスポーツする喜びを伴った自立的スポーツ活動を育成しようとする¹³⁾ ドイツ民主共和国 (いわゆる東ドイツ) の体育に注目する意義は大きいと思われる。

これまで、ドイツ民主共和国に「スポーツ章テスト」²⁹⁾があり、ひろく国民の間で実施されていることは飯塚²⁴⁾、増田²¹⁾によって紹介されているが、測定種目については上記の日本体育協会²²⁾の調査、「スポーツテスト」(松島ら²³⁾)でも、現行になる前のテストが紹介されているのみである。現在使われているドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」についても、土屋³⁷⁾がドイツ民主共和国のスポーツ宣伝冊子から一部紹介したり、社会体育指

導者の矢部³⁸⁾がドイツ民主共和国訪問記で少し触れているぐらいにしか知られていない。しかもそれらのいずれをとってみても、その測定種目や評価基準について断片的にしかわからない上に、学校体育との関連性に言及しているものは見当たらない。学校体育との関係では、正木²⁰⁾がドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の評価基準を、体力・運動能力の到達目標の観点から分析している程度である。

そこで本研究は、青少年の健全な身体発達を促し、自立的スポーツ活動を育てる体育科教育という立場から、上述したように、これまでわが国ではその全容があまり知られていないドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」を取り上げ、ドイツ民主共和国の体育において、その身体的目標と社会的目標に「スポーツ章テスト」がどうかかわり、運動領域の内容としてその各測定種目がいかに具体的に位置づき、「スポーツ章テスト」がどのように子どもの自立的スポーツ活動を鼓吹する役割を果たしているのかを、明らかにしようとするものである。そしてそのことによって、わが国の体育における体力・運動能力のパフォーマンステストの取扱いと活用法について、理論的かつ実践的な示唆がいくばくかでもえられればと思う。

2. ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」のねらい、測定種目および評価方法

2.1. ねらい

ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」は1950年に制定後、1956年、1965年、1977年と3回改正され、現在に至っている¹⁵⁾。

そこには、社会主義社会の要求の基礎にもとづいて身体的遂行能力の一貫した完成をめざす趣旨がうたわれ、合言葉「労働と祖国防衛の準備をせよ」が標榜されている。そしてすべての国民が社会主義的身体文化の価値を身につけられるよう

に、「スポーツ章テスト」の具体的ねらいとして、つぎの5点をあげている (Ministerrat der DDR²⁹⁾, p. 4)。

- 生きる喜びと楽天主義を促進すること
 - 健康をたしかにし、身体的遂行能力を高めること
 - 価値多き性格特性を刻み込むこと
 - プロレタリア国際主義と社会主義的愛国心を深化させること
 - 防衛の能力と準備を発達させ強固にすること
- 体力テストとはいえ、社会的目標を合わせもっていることが、社会主義国たるドイツ民主共和国の「スポーツ章テスト」らしいところであろう。

2.2. 測定種目の構成と評価方法

表1は「年齢段階II. 10—13歳」の例であるが、おおむねこのような5「基礎条件 (Grundbedingungen)」, 5「附加条件 (Zusatzbedingungen)」

の計10種目から成り立っている。同じ体力・運動能力要素のなかでは、男女別、年齢段階 (I. 6—9歳, II. 10—13歳, III. 14—18歳, IV. 19—34歳, V. 35—44歳, VI. 45歳以上) 別に、測定種目の選択ができたり、負荷条件が異なったりする場合があるが、基本的には男女、全年齢段階共通の測定種目である (Ministerrat der DDR²⁹⁾, pp. 13—36)。

ただし評価は、性、年齢段階別の基準によって行なわれる。表1に示した基準で、まず種目ごとに1, 2, 3点と3段階評価をする。つぎに各種目ごとの得点を合計し、その総合点によって金賞、銀賞、銅賞のいずれかを与える方法である。たとえば、年齢段階IIの10歳から年齢段階VIの54歳までは、「基礎条件」の5種目全部にわたり8点で銅賞、「基礎条件」と「附加条件」の10種目全部にわたり20点で銀賞、同じく26点で金賞となる (Minis-

表1 ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の測定種目と評価基準 (年齢段階II. 10—13歳)

種目		男 子			女 子		
		1点	2点	3点	1点	2点	3点
基 礎 条 件	1. 持久走 (男子2,000m) または ワンデリング (10km) (分)	9 : 00	10 : 00	9 : 20	9 : 00	5 : 20	5 : 00
	2. 懸垂腕屈伸 (男子)・斜め懸垂腕屈伸 (女子) (回)	1	3	5	12	25	30
	または 腕立て伏せ屈伸 (回)	8	18	22	5	10	12
	3. 立ち3段跳び (試技3回) (m)	4.30	5.30	5.70	4.40	5.00	5.25
	または 立ち幅跳び (試技3回) (m)	10—13歳 なし			10—13歳 なし		
附 加 条 件	4. ジグザグ走 (片道20m, 関門3つを) 往復 (秒)	15.0	14.0	13.2	17.0	15.0	14.0
	5. スポーツ射撃 (空気銃) または ボール的投げ (6m 先の的 ~ 5回) 注2) (成功回数)	略			略		
	6. 水泳 (持久泳, 種目自由) (分)	5	10	15	5	10	15
附 加 条 件	7. 短距離走 (5, 6学年60m) 7, 8学年100m (秒)	10.8 18.0	9.9 16.0	9.6 15.0	11.1 18.3	10.5 16.8	9.9 16.2
	8. 走り幅跳び (試技3回) (m)	2.90	3.60	3.80	27.0	3.25	3.45
	または 走り高跳び (m)	0.90	1.05	1.15	0.85	1.00	1.05
	9. 砲丸投げ (試技3回) 注3) または 遠投 (600g) (10, 11歳は150gも可) (試技3回) (m)	5.00 16 25	6.00 22 30	6.75 25 35	45.0 10 12	5.50 14 18	6.10 16 22
附 加 条 件	10. 選択スポーツ種目 (距離スキー, 自転車, 九柱戯) 球技, 器械運動, 小遊戯	略			略		

注1) 距離・スピードに関係なく9分間走りきればよい。

注2) 的は地面に直径1mで描かれる。外周45cm以上のボール使用。

注3) 砲丸の重さ, 6学年男女3kg, 7, 8学年男子4kg, 女子3kg, 9, 10学年男子5kg, 女子4kg。

terrat der DDR²⁹⁾, p. 11).

ここで注目されるのは、各測定種目の「1点」の評価基準が、たとえば、表1の10-13歳の場合、持久走が距離・スピードに関係なく男女共通で9分間走りつづけることや、男子の懸垂腕屈伸1回のように、それがかなり低いレベルにおさえられていることである。このような調子で「基礎条件」5種目で5点、それプラス3点のみの「銅のクラス」は、とくにこれまでスポーツをあまり楽しんでいるような人たちのため、あるいは体力的にそれほど充分でない人たちの手段に供される」（土屋³⁷⁾）ところの「スポーツ章」の最初の目標である。しかし銅賞といえども、5「基礎条件」まんべんなくを要求する身体の全面発達をめざす思想は、ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の大きな特徴と思われる。

3. ドイツ民主共和国における体育の目標と「スポーツ章テスト」

3.1. 教育制度における体育の位置づけ

ドイツ民主共和国の学校義務教育は、満6歳にはじまる「10年制普通教育総合技術中等学校」における10年間である。その後「拡大中等学校（アビトゥア学校）」や専門学校に進学しない場合でも、2年間の職業教育は国民の義務とされている³¹⁾。そして体育は、すべての学校段階と職業教育をとおして必修である³⁰⁾。したがってドイツ民主共和国では、最低でも「学校・職業義務教育」の12年間、だれでも体育の授業を受けていることになる。

3.2. 身体的基礎形成の到達目標

ドイツ民主共和国の学校義務教育における『体育科学習指導要領 (Lehrplan Sport)』³²⁾によると、「1学年において、すべての子どもたちのために体系的な身体的基礎形成 (körperliche Grundausbildung) がはじまる」(Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 15)。そして「9, 10学年のスポーツ授業 (Sportunterricht)」³³⁾でもって、すべての生徒たちのための統一的な体育 (Körpererziehung) の重要な側面が終了する」(Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 92)。

そのように身体形成の課題を担わされたドイツ民主共和国の体育において、「スポーツ章テスト」の基準は、1学年で「獲得すべき」(Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 6)と方向づけられ、2, 3学年で獲得に向けて、「努力されるべき」(Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 26, 45)とされ、4学年では「成果の多い陶冶と教育の重要な尺度は、『スポーツ章』獲得に向けての子どもたちの努力である」(Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 65)と意義づけられる。

そして5学年から10学年までは、「スポーツ章」は「生徒たちの多数 (Mehrheit) が…銅ないし銀で達成すべき」(Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 6)課題となる。さらに、11, 12学年では、「できるかぎり多くの青少年が銀と金において『スポーツ章』の基準を達成することが、確実にされるべきである」²⁸⁾と、目標が高められる。

すなわち、ドイツ民主共和国の体育の『指導要領』における「スポーツ章テスト」の位置づけをとおしてみると、4学年（9歳）まではその基準獲得に向けての方向づけ・努力目標であったものが、5学年（10歳）から10学年（16歳）にかけては銅賞ないし銀賞という具体的な目標の提示となり、12学年（18歳）までに可能なかぎり銀賞ないし金賞に引き上げようとする意図が明らかである。ドイツ民主共和国の体育の主要目標である身体的基礎形成において、「スポーツ章」の基準は具体的な到達目標として機能しているのである。

3.3. 体力・運動能力の到達目標の水準とその意義

その身体的基礎形成の一環として、ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」は、どの程度の体力・運動能力の水準を要求しているのだろうか。同じように到達目標方式の評価方法を採用している社会主義国の体力テストと比較してみたい。ドイツ民主共和国の「スポーツ章テスト」、ソ連の総合体力章検定 ГТО³⁴⁾、中国の「国家体育鍛錬標準」³²⁾の間には、測定種目と方法とが共通するテストとして、懸垂腕屈伸（男子）、100m 走（男女）、走り幅跳び（男女）の3種目がある。この3カ国のテストについて、将来の社会生活を見通した到達目

表2 懸垂と100m 走の到達目標の国際比較—独ソ中社会主義3カ国—

	懸垂腕屈伸(回)			100m 走(秒)					
	男 子			男 子			女 子		
	1点	2点	3点	1点	2点	3点	1点	2点	3点
ドイツ 民主共和国 (年齢段階III (14—18歳) 年齢段階IV (19—34歳))	4	9	11	15.0	13.5	13.0	18.0	16.2	15.5
	3	8	11	15.0	14.0	13.5	19.0	17.0	16.0
		銀	金		銀	金		銀	金
ソ 連 (年齢段階III (16—18歳) 年齢段階IV (19—28歳))		8	12		14.2	13.5		16.2	15.4
		{ 9	{ 13		14.0	13.0		16.0	15.2
		7	11						
		標準			標準			標準	
中 国 (少年2組 (16, 17歳) 青年組 (18—30歳))		8			14.4			16.8	
		9			14.0			16.5	

注1) ドイツ民主共和国は「スポーツ章テスト」、ソ連はΓTO、中国は「国家体育鍛錬標準」による。

注2) ソ連の年齢段階IV (19~28歳)の懸垂腕屈伸の基準は、上が体重70kg以下、下が70kg以上のものにたいして。

標をくらべてみよう。

懸垂腕屈伸(男子)(表2)からみると、ドイツ民主共和国の2点の9回(14—18歳)、同じく8回(19—34歳)は、ソ連の銀、中国の「標準」の水準に該当し、3点の11回は、ソ連の金の水準にほぼ相当している。そしてソ連にも、中国にもない低い水準の到達目標が、1点の4回ないし3回である。2.2.節でのべた「スポーツ章」銅賞の趣旨と同様、どんなに運動のできない人でもスポーツと体力づくりへ動機づけていくねらいが、このドイツ民主共和国の「1点」に込められているのである。

100m 走(表2)についても、ドイツ民主共和国の1点の水準には、同様の意味で注目しておきたい。つぎに男子の2点13.5秒(14—18歳)をみると、ソ連の銀、中国の「標準」より高く、3点13.0秒でソ連の金と同じ水準になることがわかる。女子の2点は、中国の「標準」より高い水準にあるが、ソ連の銀より低く、3点もソ連の金より低い。男子の場合、1点で動機づけた後は、やや高いレベルの2点にじっくりととりくませ、さらに高いレベルの3点へ向かわせるが、女子にたいしては、2点、3点の目標も男子より到達しやすくし、実情に合った形で「スポーツ章」獲得を促進する配慮がなされているように思われる。

図1は走り幅跳び(男子)についてであるが、100m 走で考察したごとく、ドイツ民主共和国「ス

ポーツ章テスト」の3つの到達目標にみられた傾向は、ここでも明らかである。

さて走り幅跳びは、男女とも、その独ソ中社会主義3カ国に日本³¹⁾も加えて比較ができる唯一の種目である。図1にプロットされた日本の男子の平均値の年齢別推移をみると、高校生の年齢(16—18歳)は、ドイツ民主共和国の1点を凌駕しているばかりか、ソ連の同年齢の銀なみである。ドイツ民主共和国の2点は、日本の高校生男子にとって平均値をかなり越えたレベルに思えるが、19歳以降になればドイツ民主共和国の2点もソ連の銀も日本の平均値なみか、それ以下である。図示は割愛したが、女子でも、わが国19歳以降の平均値は、ドイツ民主共和国の2点の水準であることをつけ加えておきたい。

こう分析すると、わが国青年層は必ずしも、常に低い体力・運動能力の水準にあるわけではない。問題は、このレベルをいかに持続させ、スポーツ参加を推進するための学校体育のあり方、社会体育の条件づけがあるかということであろう。この点では、図1から読み取れるように30歳前後まで20歳のレベルを維持させる社会主義3カ国の体力テストの到達目標は教訓的である。とくにドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の場合、各測定種目の最初の目標にソ連や中国にはない工夫がこらされており、総合評価の「スポーツ章」である銅賞、銀賞、金賞のいずれもスポーツ参加が前提

図1 走り幅跳び(男子)の国際比較—独ソ中社会主義3カ国の到達目標と日本の
— 平均値 —

になっている (Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 7) ことが際立っている。

体力・運動能力の到達目標の達成とスポーツ参加の平行的推進, これはドイツ民主共和国の最近において, “körperliche Grundausbildung = körperlich-sportliche Grundausbildung”⁴⁾と, 身体的基礎形成の目標が, 身体的にスポーツ的を加えた「身体・スポーツ的基礎形成」に置き換えられる場合があることとも関係があろう。

3.4. 社会的目標と「スポーツ章テスト」の合言葉

学校義務教育の仕上げ期である9, 10学年において, 体育の『指導要領』(Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 92) は, 「目標と課題」の冒頭でつぎのようにいう。「身体的遂行能力, 健康と生きる喜びは社会主義社会における全面的に発達したパーソナリティの表われであり, 青少年が職業的・社会生活をいとなみ, より進んだ陶冶への精神的・要求と国土防衛の必要性に適合していく前提である」(傍点筆者)。つまり「労働と祖国防衛の準備をせよ」(傍点筆者)

というドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の合言葉は, 体育の社会的目標と一致しているのである。

このように「スポーツ章テスト」の思想内容である生産労働, 国土防衛という政治的・道徳的・形成は, 発達上の考慮からか, 7, 8学年から強調されはじめ, 公民, 歴史, ドイツ語などの教科, あるいはピオニールなどの学外における青少年組織の教育とも関係づけられている (Ministerrat der DDR²⁷⁾, pp. 52—53)。

「労働と祖国防衛の準備をせよ」という思想性は, 現在のわが国の体育・スポーツにはなじみにくい, ソ連の総合体力章検定 GTO の意味もそうであるように, これは多分に社会主義国の体力テストが共通にもつ社会的目標である。

ドイツ民主共和国の体育における「スポーツ章テスト」は, 身体的基礎形成, 体力・運動能力の到達目標としてばかりでなく, その合言葉が社会的目標の役割もはたしているのである。

表3 体育（「通常計画」）の運動領域—ドイツ民主共和国—

学 年 領 域	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
基本運動					○	○	○	○	○	○
陸上競技（陸上競技的運動）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
球技（遊戯）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
器械体操（器械運動）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
体操（体操的運動）	○	○	○	○	○	○	女	女	女	女
格技									男	男
冬季スポーツ					○	○	○	○		
水泳							○	○		

注1) ○男女共通, 男男子のみ, 女女子のみの領域。

注2) ()内は, 1-4学年の領域名。

注3) 7, 8学年の基本運動, 冬季スポーツ, 水泳はセットになっている。11, 12学年の領域は10学年までと同じ。

表4 「単元の重点」（2学年からの抜粋）

単 元	教材・技能	能 力	できばえの見きわめ	スポーツ章
2. 陸上競技的運動	持久走, 障害走, ボール遠投, メディシンボールで運動, ボールリレー	持久力, 反応能力	持久走, ボール遠投	持久(Gb), ボール遠投(Zb)
3. 遊戯	「立て, 走れ」「黒・白」, 綱引き, 足跡越えボール	持久力, 空間定位能力	「立て, 走れ」	追いかけてボール(Zb)
4. 体操的運動	空洞ボールで運動, リズム歩行と走, 跳び歩き	力, リズム能力	ボール運動, 立ち3段跳び	立ち3段跳び(Gb)
8. 器械運動	跳躍開脚, よじ登り, 障害物体操	力, 運動感覚的判別能力	跳躍開脚, あおむけから腰を浮かせる	懸垂腕屈伸(Gb)
11. 陸上競技的運動	スタート・走運動, 跳躍運動	速さ, 反応能力	60m 走, 走り幅跳び	60m 走(Zb), 走り幅跳び(Zb)
13. 遊戯	「狼師ボール」, ボールリレー	速さ, 反応能力	学年末評価	スポーツ章授与

注) (Gb)は, 「スポーツ章テスト」の「基本条件」種目, (Zb)は, 同じく「附加条件」種目。

4. ドイツ民主共和国における体育の内容と「スポーツ章テスト」

4.1. 運動領域における内容

『指導要領』の説明書である『体育科指導書（Unterrichtshilfen Sport）』⁵⁴⁾（Autorenkollektiv⁵⁾, 各 p. 3）によれば, 1学年と2学年において, 「スポーツ章」の獲得は, 身体的基礎形成とならぶ「目標の順序づけ」になっている。3学年においても, ほぼ1, 2学年と同じ形で「スポーツ章」の獲得が目標化されている（Autorenkollektiv⁷⁾, p. 4）。そして1学年から3学年までは, 表4に示したような年間の「単元の重点」（Autorenkollektiv⁶⁾, pp. 10-11）の内容と

して, 体育の全運動領域（表3）において「スポーツ章テスト」の測定が授業と平行して行なわれる。その測定種目が各単元でねらわれている能力や「できばえの見きわめ（Leistungskontrollen）」に位置づけて生かされており, 「遊戯（Spiele）」領域では学年末評価と関連づけて「スポーツ章」が与えられる。4学年でも, それまでの延長線上で「スポーツ章テスト」の測定種目が, 体育の授業と関連づけられる（Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 65）。

5学年から「基本運動（Grundübungen）」が新しい運動領域として加わり, たとえば4学年までの「遊戯」「陸上競技的運動（Leichtathletische Übungen）」の領域名が, 「球技（Sportspiele）」「陸上競技（Leichtathletik）」に変わる。心身の発達

に伴って内容がそれだけスポーツ化したわけであるが、だからこそ「…基礎的スポーツ種目における形成のための前提でもある」(Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 65) ところの「基本運動」が必要になるというのが、ドイツ民主共和国の「基本運動」の考え方である。

したがって5学年から10学年においては、「スポーツ章テスト」の基準は、内容的に「基本運動」と関係するものが多い。しかしあくまで『指導要領』は、国の『スポーツ章テスト』の遂行要求を、すべての年齢段階に組み入れる」(Ministerrat der DDR²⁷⁾, pp. 8—9)が基本であり、「基本運動」以外の領域にも、「スポーツ章テスト」の基準は組み込まれている。ただしこの年齢段階になると、各運動領域の内容が多岐にわたるため、表4の「単元の重点」のように一括して「スポーツ章テスト」の測定種目は示されていないが、『指導書』^{(8), (9), (10)}の「年間計画」には、「できばえの見きわめ」としてその基準が適宜挿入されている。

体育の各運動領域における教材のすべてに、「スポーツ章テスト」の「基礎条件」「附加条件」の10種目が内容化されているわけではないが、子どもの学習内容と相応させられるものについては、国が決めた体力テストである「スポーツ章テスト」の測定種目が、具体的に体育の内容に入っていることは、ドイツ民主共和国の体育において「スポーツ章」獲得が、いかに重視されているかの表われであると思う。

4.2. 評価と「スポーツ章」の所有

ドイツ民主共和国の体育では、「スポーツ章」を獲得することが評価と結びつけられている。表5²⁵⁾は、『評価、テスト、成績証明』(Hauptabteilung Oberschulen des Ministeriums für Volksbildung der DDR¹⁶⁾)という全教科の評価尺度などをまとめた公的出版物にも収録されている体育評価の統一的基準の一部である。これによって、金賞、銀賞、銅賞のいずれかの「スポーツ章」の所有が、『指導要領』にもとづく運動領域・種目の評価点に換算される²⁵⁾のである。

「…もしそのことによって学年末の評定²⁶⁾がよくなるのであれば」²⁵⁾というただし書きつきでは

表5 「スポーツ章」の所有の体育評価への換算

1—12学年の学年評価		1	2	3	4
「スポーツ章」の所有	金	—	1	2	—
	銀	—	—	2	3
	銅	—	—	—	3

注)「1」がもっとも高く、「4」がもっとも低い評価点。

あるが、これも、ドイツ民主共和国の体育における、「スポーツ章」獲得への努力を体育学習への励みとしたい姿勢の一端であろう。

4.3. 自立的スポーツ活動における「スポーツ章テスト」

ドイツ民主共和国の教科体育は、学校の外でも子どもが積極的にスポーツするように動機づけていくことも重要な柱としている。

『指導要領』(Ministerrat der DDR²⁶⁾, p. 7, 27, 46, 67)の表現どおりにいえば、1学年から4学年の間は、自由時間における「スポーツ的自立活動(sportliche Selbstbetätigung)」への刺激であり、そのための有力な手段が授業外で行なう「自立的練習(selbständiges Üben)」課題を与えることである。そしてたとえば、体育の現場では、『自由時間における自立的スポーツ活動への導入ノート』『自立的スポーツ的活動のための日記』(Pädagogische Hochschule Zwickau^{33), (34)})のような実践がやられている。この内容は、「スポーツ章」獲得に向けての『運動集』(Autorenkollektiv³⁾)にあるような体力づくり運動を、子ども用に選択し、順序づけ、構成した体力づくりの「点検表」である。そこでは、「大きな喜びとスポーツ的熱中」(Pädagogische Hochschule Zwickau³⁴⁾, p. 1)をもって、子どもが規則的、自立的にそれにとりくむことが期待されている。この場合、教科体育で動機づけていくべき自立的スポーツ活動は、明らかに「喜びを伴った体力づくり」であり、その獲得目標は「スポーツ章」である。

しかし自立的スポーツ活動の内容が、常に体力づくりというわけではない。5学年以降、それは、『指導要領』(Ministerrat der DDR²⁷⁾, p. 8)では「課外スポーツ(außerunterrichtlicher Sport)」

をさして呼ばれることが多く、「学校スポーツ共同体 (Schulsportgemeinschaft)」「ドイツ体操・スポーツ連合 (Deutscher Turn- und Sportbund)」における規則的スポーツ活動が強調されている。そしてこのような場でも、各種スポーツ活動と平行して「スポーツ章テスト」が行なわれている²⁾。さらに、「自由ドイツ青年団 (Freie Deutsche Jugend)」, ピオニールなどの青少年組織, 労働組合のスポーツ組織, 一般市民向けのスポーツ行事などでも、「スポーツ章テスト」は実施されている³⁵⁾。

ドイツ民主共和国において、「『スポーツ章テスト』は、すべての国民のための社会的基準である」¹⁴⁾。ここ数年は、年間約400万人(子ども120万人, 青年80万人, 大人200万人)が「スポーツ章」を獲得している¹²⁾というから、国民約4人に1人は毎年「スポーツ章」を取っている計算になる。このような状況のなかで、「スポーツ章」獲得成績の模範的な学校が、「体育・スポーツ国家事務局 (Staatssekretariat für Körperkultur und Sport)」から表彰されたと報じられている¹¹⁾。

ドイツ民主共和国の教科体育が、子どもをしむけようとしている自立的スポーツ活動においても、「スポーツ章テスト」が積極的に実施されていることは、体力テストとスポーツ参加の平行的推進によって身体の全面的発達をはかろうとする両面作戦と理解できよう。

5. 要約と結論

「身体的基礎形成」を主要目標とするドイツ民主共和国の教科体育に注目し、その目標と運動領域における「スポーツ章テスト」の位置づけについて分析を試みた結果、つぎのようなことが明らかとなった。

1. ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」の金賞, 銀賞, 銅賞の基準は、「学校・職業義務教育」の12年間をとおして、「身体的基礎形成」の到達目標になっている。

2. ドイツ民主共和国「スポーツ章テスト」を構成している「基礎条件」「附加条件」の体力・運動能力の「1点」は、同じ社会主義国であるソ連や

中国の体力テストにもない低い水準の到達目標である。これがどんなに運動のできない青少年でも、かれらをして、身体形成とスポーツ参加へ向かわせる有効な働きをしているように思われる。

3. 「スポーツ章テスト」の合言葉「労働と祖国防衛の準備をせよ」は、ドイツ民主共和国の体育のもつ社会的目標と一致している。

4. 「スポーツ章テスト」の各測定種目は、ドイツ民主共和国の体育のすべての運動領域において、めざされている能力や「できばえの見きわめ」などの内容として具体的に位置づいている。

5. 「ドイツ民主共和国」において、「スポーツ章」の保有は、学年末評価の採点に算入され、子どもの体育学習を刺激する役割をしている。

6. ドイツ民主共和国の教科体育が育成しようとしている自立的スポーツ活動において、「スポーツ章テスト」は積極的に実施され、青少年の身体の全面的発達に貢献している。

そのようなドイツ民主共和国における体力・運動能力テストの考え方は、わが国青少年に将来にわたる身体形成とスポーツ実践の自立的能力を内面化させようとする体育科教育の立場からみても、社会体制の相違を乗り越えて、有益な示唆が多いと思われる。

注

注1) ドイツ民主共和国では、体育に該当する教科は現在 Sport と呼ばれているが、ここでは、それが身体形成を主要な目標・内容とする社会主義国の“Sport”科である点から、「スポーツ」と直訳せず、以下「体育」と統一する。

注2) わが国の文部省『〔保健〕体育科学習指導要領』との混同を避けるため、ドイツ民主共和国の“Lehrplan Sport”については、以下、あえて『指導要領』と略記する。

注3) 体育の授業のこと。同じ引用文中の「体育 (Körpererziehung)」とまぎらわしいので、このように直訳した。

注4) 著作者集団による『指導要領』の説明書ないし手引き書である。ここでは、わが国の文部省『小・中学校指導書』に性格的に類似しているところから、『指導書』としておく。

注5) 表3の運動領域でいうと、球技, 器械体操, 体操, 冬季スポーツ, 水泳は1つの領域, 陸上競技と基本運動は両者合わせて10種目前後(性, 学年に

よって若干異なる)が1つの領域に準じて評価対象となっている(Ministerium für Volksbildung der DDR²⁵⁾, pp. 8—16). 絶対評価基準による4段階評価で、一定レベル以下は評価点なしとなる。

注6) 各教科の評定は、5段階の絶対評価で行なわれている(Hauptabteilung Oberschulen des Ministeriums für Volksbildung der DDR¹⁶⁾).

引用・参考文献

- 1) Akademie der Pädagogischen Wissenschaften der DDR, Das Bildungswesen der DDR, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1983. p. 19.
- 2) Autorenkollektiv unter der Leitung von Baskau, H., Übungs- und Trainingsbetrieb in Schulsportgemeinschaften, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1977. p. 12.
- 3) Autorenkollektiv der Arbeitsgruppe Freizeit- und Erholungssport der DHfK, Sportabzeichenprogramm der DDR „Bereit zur Arbeit und zur Verteidigung der Heimat“ Übungssammlung, Sportverlag: Berlin, 1977.
- 4) Autorenkollektiv unter Leitung von Knappe, W., et al., Methodik des Sportunterrichts (Lehrmaterial zur Sportwissenschaft), Band 1, Wissenschaftlich-Technisches Zentrum der Pädagogischen Hochschule „Karl Liebknecht“ Potsdam: Potsdam, 1984. p. 16.
- 5) Autorenkollektiv unter Leitung von Knappe, M., et al., Unterrichtshilfen Sport Klasse 1, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1982.
- 6) Autorenkollektiv unter Leitung von Knappe, W., et al., Unterrichtshilfen Sport Klasse 2, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1982.
- 7) Autorenkollektiv unter Leitung von Knappe, W., et al., Unterrichtshilfen Sport Klasse 3, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1982.
- 8) Autorenkollektiv unter der Leitung von Hofmann, H., et al., Unterrichtshilfen Sport Klassen 5/6, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1972, pp. 129—66.
- 9) Autorenkollektiv unter der Leitung von Hofmann, H., et al., Unterrichtshilfen Sport Klassen 7/8, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1972, pp. 79—92, 167—82.
- 10) Autorenkollektiv unter der Leitung von Endert, T., et al., Unterrichtshilfen Sport Klassen 9/10, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: 1973. pp. 87—98, 175—86.
- 11) Bezirksleitung Magdeburg der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, Volksstimme (Organ der Bezirksleitung Magdeburg), 10/12/1985.
- 12) Borgmann, B., “35 Jahre Sportabzeichenprogramm der DDR”, Theorie und Praxis der Körperkultur, 4/1986: 266—70, 1986.
- 13) Drenkow, E., et al., Körperliche Grundausbildung in der sozialistischen Schule, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1982. pp. 57—59.
- 14) Erbach, G., “Das Sportabzeichenprogramm der DDR—Bereit zur Arbeit und zur Verteidigung der Heimat”, Körpererziehung, 27 2/3: 65—71, 1977.
- 15) Erbach, G., et al., Kleine Enzyklopädie „Körperkultur und Sport“, VEB Bibliographisches Institut: Leipzig, 1972. pp. 676—79.
- 16) Hauptabteilung Oberschulen des Ministeriums für Volksbildung der DDR, Zensuren Prüfungen Zeugnisse—Eine Zusammenstellung von Rechtsvorschriften, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1985. pp. 51—53.
- 17) Ивонин, В. А. et al., Спутник Физкультурного Работника, Физкультура и Спорт: Москва, 1972. pp. 347—67.
- 18) ククシキン(編)(川野辺敏ら訳), ソ連の体育システム, ナウカ, 1984. p. 41. (Кукушкин, Г. И. et al, Система Физического Воспитания в СССР, Издательство Прогресс Москва, 1984.)
- 19) ラーソンら(石河利寛ら訳), 健康・体力標準テスト, 大修館書店, 1986, p. 225—34. (Larson, L.A., et al., International Committee for the Standardization of Physical Fitness Tests, Macmillan Publishing Co., Inc. 1974.)
- 20) 正木健雄, 「子どものからだとその発達」日本民間教育団体連絡会(編), 教育学基礎理論講座 III, 教育史料出版会, 1982, pp. 90—92.
- 21) 増田靖広, 世界の国民スポーツ(下), 不昧堂, 1977, pp. 207—08.
- 22) 松井秀治ら, 「一般体力テスト項目検討」朝比奈一男(班長), 昭和50年度日本体育協会, スポーツ科学研究報告, No. II, 体力テストの検討—第2次報告, 1975, pp. 9—34.
- 23) 松島茂善(編著), スポーツテスト, 第一法規出版, 1963, pp. 228—30.
- 24) 飯塚鉄雄「東独第6回スポーツ祭・青少年スバルキアダに学ぶもの(2)」体協時報, 290: 7—10, 1977.
- 25) Ministerium für Volksbildung der DDR Abteilung Sport, Empfehlungen und Zensierung im Schulsport, 6. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1984. p. 6.
- 26) Ministerrat der DDR Ministerium für Volksbildung, Lehrplan Sport 1 bis 4, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1982.
- 27) Ministerrat der DDR Ministerium für Volksbildung, Lehrplan Sport 5 bis 10, 4. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin, 1983.
- 28) Ministerrat der DDR Ministerium für Volksbildung, Lehrplan Sport Abiturstufe und Berufsausbildung, 2. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener

- Verlag : Berlin, 1980. p. 6.
- 29) Ministerrat der DDR Staatssekretariat für Körperkultur und Sport, Sportabzeichenprogramm der DDR „Bereit zur Arbeit und zur Verteidigung der Heimat“ Bestimmungen und Bedingungen, Nationales Druckhaus : Berlin, 1978.
- 30) 文部省体育局, 「スポーツテスト実施要項」文部省体育局 (監), 体育・スポーツ総覧 (3), ぎょうせい, 1964. pp. 5181—204.
- 31) 文部省体育局, 昭和60年度体力・運動能力調査報告書, 1986. p. 47.
- 32) 大島鎌吉「中国の新体力テスト」体協時報, 310:5—9, 1979.
- 33) Pädagogische Hochschule „Ernst Schneller“ Zwickau Sektion Sportwissenschaft, Anleitungsheft für selbständiges Sporttreiben, Ministerium für Volksbildung : Berlin, 1982. Pp. 16.
- 34) Pädagogische Hochschule „Ernst Schneller“ Zwickau Sektion Sportwissenschaft, Tagebuch zur selbständigen sportlichen Betätigung, Ministerium für Volksbildung : Berlin, 1982. Pp. 15.
- 35) Schan, K., et al., Der Sportfunktionär—Hinweise und Anregungen für die ehrenamtliche Tätigkeit des Sportfunktionärs, Sportverlag : Berlin, 1978. p. 65.
- 36) Thieß, G., et al., Training von A bis Z, Sportverlag : Berlin, 1980. p. 133.
- 37) 土屋和平 (訳) 「A New Sports Badge Programme —4'77 Sports in the GDR」体協時報, 294:17—20, 1978.
- 38) 矢部国夫「ドイツ民主共和国 (DDR) のスポーツ (2)」健康と体力, 12—10:98—99, 1980.
-